論文の和文要旨

論文題目	認識的モダリティ副詞と叙法の関係に関する一考察
氏名	廣田晴信

本稿では、スペイン語の認識的モダリティ副詞と叙法との関係を考察する。スペイン語の認識的モダリティ副詞は、叙法導入辞としての機能を有している。このタイプの副詞が動詞に前置された場合には、後続する動詞の叙法が直説法にも接続法にもなり得るため、その叙法の決定要因について、これまで分析が進められてきた。

この叙法導入辞としての機能について、個々の認識的モダリティ副詞に応じて特性があることが明らかにされてきており、例えば quizá や tal vez は接続法を導きやすい一方、a lo mejor や seguramente は直説法を導きやすい。このような叙法との共起関係から、副詞の分類を試みた研究や個々の副詞の共起特性を明らかにする研究が、これまで進められてきた。また、認識的モダリティ副詞が、命題の蓋然性・可能性を意味する表現形式であることから、副詞の意味する蓋然性や可能性の程度を基に、副詞の分類を試みた研究も行われている。

この認識的モダリティ副詞が用いられている文は、スペイン語学では疑惑文と呼ばれる。昨今では、マルチモーダルの視点から、疑惑文における叙法交替への影響として、副詞以外の要素に焦点を当てた分析が進められている。その結果、言語的要因以外にも、テクストジャンルや地域・話者の教育レベルによって叙法の選択に差異のあることが示されてきている。

以上のように、認識的モダリティ副詞と叙法の関係については、先行研究で多くのことが明らかにされてきたが、依然として個々の副詞の特性や副詞以外の要素について十分に明らかになっていない点がある。したがって、本稿では以下の点を研究課題として据え

た。

・認識的モダリティ副詞を個別的に分析し、動詞の叙法との関係を明らかにする。
・副詞以外に叙法に影響を及ぼす要素を統計的に明らかにする。

本稿では、スペイン語の認識的モダリティ副詞を分析することを対象にするが、副詞は意味の分布幅が大きく、話者の発話内容に関する意図が含まれていることから、その分布を明らかにすることを研究目的としている。手法としては、モダリティを表すとされる叙法選択の判断が確率的であることから二項ロジスティック回帰分析を、叙法選択の判断の規則をデータからの帰納推論で明らかにするために決定木分析を行う。また、統計的手法を用いた分析結果を実際の用例に照らし合わせて、定性的に比較検証を行った。

本論文は、7 章から構成されている。第 2 章では、モダリティを扱った先行研究を概説し、それらの内容を踏まえ、モダリティは発話する主体の意志や態度を表す言語形式として定義した。そのうえで、Palmer（2001）を参考に、モダリティを発話内容のモダリティと発話行為のモダリティに大別し、前者をさらに、命題的モダリティと事象的モダリティに分割した。このうち、本稿で扱う認識的モダリティを命題的モダリティのサブカテゴリーに位置付けた。

第 3 章では、認識的モダリティ副詞の種類や叙法との関係について、先行研究の内容から検討し、本稿で扱う認識的モダリティ副詞を quizá(s), tal vez, a lo mejor, acaso, lo mismo, igual, posiblemente, probablemente, seguramente, difícilmente の 10 個とした。

第 4 章では、分析の用いた変数や二項ロジスティック分析、決定木分析といった分析の手法について実例を基に説明し、第 5 章で、分析の結果を報告している。

第 6 章では、分析の結果を踏まえて、用例を交えながら、疑惑文中での叙法の交替に影響を与える要素について考察した。分析と用例検証の結果、認識的モダリティ副詞を i）基本的に直説法と共起する副詞、ii）直説法と共起しやすいが、接続法とも共起する副詞、iii）相対的に接続法と共起しやすい副詞の 3 つのグループに副詞を分類するに至った。

i）直説法との親和性が強い副詞
　a lo mejor, seguramente, difícilmente
ii）直説法との親和性が強いが、接続法とも共起する副詞
　probablemente, acaso
iii）接続法との親和性が強い副詞
　posiblemente, quizá, quizás, tal vez

ただし、接続法との親和性が強い場合であっても、半数近くは無標の直説法と共起していることから、この分類はあくまで、認識的モダリティ副詞というカテゴリーの中での比較対照でしかない。

また、副詞以外にも、地域・極性・参照時間・副詞の位置等が叙法の選択に影響を及ぼしていることが統計的に示された。地域については、ラテンアメリカ地域の中で使用される叙法の傾向に差異が生じており、アンデス山脈が大まかな境界線となっていることが示された。この点については、先住言語の影響からアンデス山脈以西では言語規範の圧力を受けていないため、接続法が使用されない傾向にあることを示唆した研究も存在しているが、本研究の目的は、そのような背景事象を説明するのではなく、統計的に叙法の選択に影響を与える要素を見出すことであるため、地域と叙法の関係をまとめるまでに留めた。

I）直説法が使用されやすい地域
Andina, Caribe continental, Chilena, México y Centoamérica
II）直説法も接続法も使用される地域
España, Guinea Ecuatorial
III）接続法が使用されやすい地域
Antillas, Río de la Plata

この分類の中で、特に Río de la Plata、つまりラプラタ川流域国では接続法を使用する傾向が非常に強かった。以上のように、地域に応じても叙法との選択傾向に差異が生じていることが明らかになった。

言語的変数のなかで、副詞の位置や参照時間にも叙法と関係があることが示された。ロジスティック回帰分析と決定分析の結果から、副詞が文頭に位置する場合に接続法が選択されやすい傾向にあった。この点については、副詞の位置によって修飾する内容が異なっており、文頭に位置した場合には、文副詞として文全体のモダリティに影響を及ぼし得る点を文中で指摘した。参照時間については、現在を参照している場合には接続法が用いられやすいが、過去を参照している場合には直説法が用いられる傾向にあることが明らかになった。極性についても差異が生じており、肯定文や疑問文では直説法が好まれるが、否定文では比較的に接続法が使用されやすい傾向が示された。

第 7 章では、結果や考察の内容を基に結論を述べている。認識的モダリティ副詞と叙法の関係については、個々の副詞と共起しやすい叙法との関係に焦点を当てた研究が多く、各用例の言語的環境を踏まえた研究は十分に進められてこなかった。しかしながら、本稿の分析によって、認識的モダリティ副詞が用いられている文中では、副詞が叙法選択に与えている影響は強いものの、その他にも影響を及ぼしている因子が存在していることが明らかになった。つまり、副詞の種類のみで共起する叙法が決定しているわけではなく、副詞の周辺環境や地域、テクストに関わる因子も重なって叙法が選択されている。また、決

定木分析の結果を踏まえると、副詞以外の要素が、副詞と叙法との共起特性を強めている。

その一方で、本稿の課題として、①認識的モダリティ副詞の蓋然性の差異を定量的に示すことができなかった点、②書き手に関する情報が不足していた点、③話し言葉のデータ数不足と偏りの 3 点があげられる。①に関しては、本稿において、二項ロジスティック分析のオッズ比や決定木分析のノード内の比率によって、各副詞の叙法との関係について統計的に示した。しかしながら、この数値はあくまで叙法との関係性を表す数値であり、蓋然性の程度を示しているものではない。②について、本稿では 5000 例以上の書き言葉のデータを分析の対象としたが、書き手に関する変数としては、地域しか用いることが出来なかった。話し言葉の分析において教育レベルが叙法の交替に影響を与えていることが明らかになったことを踏まえると、書き言葉において書き手の社会的背景が、叙法に影響を及ぼしていることは想像に難くない。③に関しては、書き言葉の用例が 5093 例であったのに対し、話し言葉の用例は 1217 例であった。また、話し言葉のデータでは、変数によってデータ数に偏りがあった。例えば、副詞は a lo mejor のデータが多く含まれており、地域に関してはスペインのデータが多数を占めていた。

本稿では、上記のように認識的モダリティ副詞の叙法との関係や、副詞以外に叙法に影響を及ぼす要素を統計的に明らかにするに至った。その結果、疑惑文における叙法の交替は、マルチモーダル的な現象であることを示した。